金 子 家 住 宅

金子家住宅は、主屋、それに隣接するノコギリ屋根３連工場、蔵、従業員宿舎が一つの敷地に美しい形で納まっている。平成６年（1994）、１５０年経った主屋をさらに１５０年維持するために、柱と梁のみを残し、古民家再生の技術により大改修された。明治初期は主屋だけからなり、その後、蔵（明治２７年金子徳三郎建之の墨書あり）、主屋と蔵のつなぎを増築、その裏に二階建ての隠居部屋を建てた。そのときに寄宿舎と塀部分を現在地に曳いたという。

金子織物は、明治元年金子徳三郎氏により創業された。当時男性用の銘仙が流行、同社も銘仙を製織して多数の外注工場の協力を得ながら基盤を築いた。大正末期頃から男子服の洋服が進んだことから、三代目の正二郎氏は、銘仙の需要減を見越し、広幅織機を導入、女性の和装コート地を織るようになった。昭和に入ると「満韓支」やインド向けのサリーなど事業は海外へと広がっていくが、戦時中すべての織機を供出したため中断。邸内のノコギリ屋根工場は取壊し、自給用の畑にした。戦後はいち早く半木製の手織・足踏み機により織物業を復活させ、現在のノコギリ屋根３連工場を新築、昭和２３年（1948）に金子織物株式会社として再起動した。敷地外の第一工場のノコギリ屋根４連工場は昭和１１年（1936）に建てられたもので、木造、瓦葺き、面積は五百平米、桐生織物の全盛期に作られただけに重厚な建物であったが、平成１７年（2005）に解体された。

同社はアメリカの婦人コートの裏地を輸出し、特殊技術を多用した婦人服地は高い評価を得ている。なかでも「フェザーカット織物の製造技術」は群馬県の一社一技術に認定されている。タテ糸を二重、三重にして織り、その一部を特殊刃物でカット立毛させ、ソフトなベルベット紋様を創り出す独特なものである。製品はニューヨーク近代美術館をはじめ幾つかの美術館に永久保存されている。現在は第二工場で婦人服地７割、カーテン地３割を生産している。４代目宗吉氏を経て、現在５代目の明裕氏が社長を務めている。

世界的な技術や製品がここから生み出されており７０年近いものづくりの営みが、建物に風格と歴史の厚み、そして堅実さを与えている。

所 在 地　桐生市東久方町２－１－３０
所 有 者　金子　宗吉